句草の宮

二十七

詞書名こせり

[V. 42]

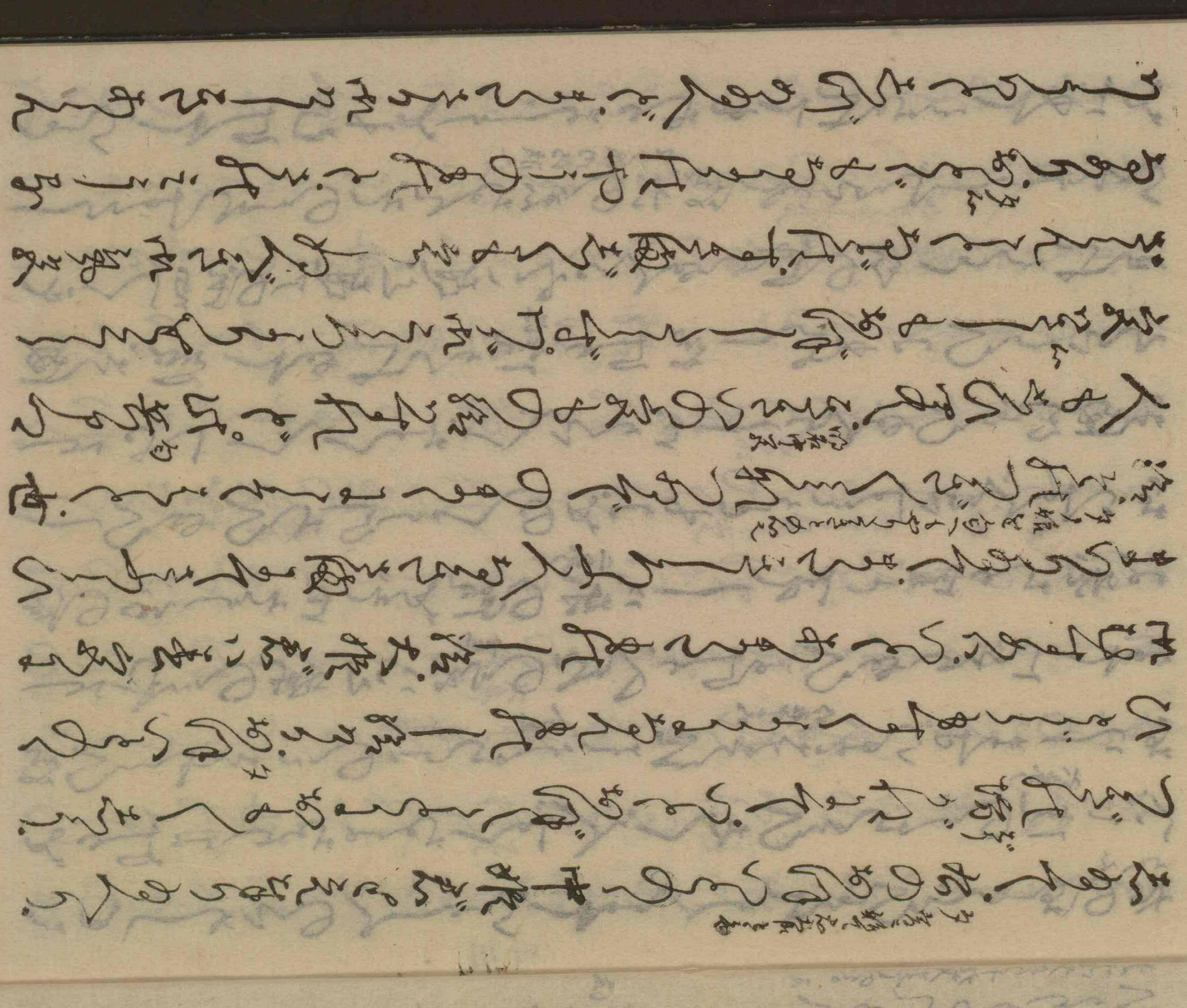
PL788
.4
.G4
1654
vol. 42
Copy 1
Asian
Japan
Case

2004551302

蕉十四歩より十九歩までのこと　ある

ひかりうれぬひかりし後、これ（泛）うけに立川ぎぬふ
べき人ぞうらのれすゑぐにありがたるなり。
ありねのこうどをうけ（冷泉院ハ密通ノ仕事ゐれハ）まんいうてけるしたう
ぐいの三の（白）宴それおるじ（大宮院）おとゞうてなひ出給し
宴（五三）の着（蕉）ぶとこれ二所なん。さりぐにさよらなる
（九）にとりぬてげにいとなべてなるぬれありさ後
おもめれどいとまばゆきにはなりをざるべし。
そこよれつものひとざ後にめでたくあてにる後め
しくおかすをもとしてさうれなるしひ。
人のさひ事しうもてなしを様もいかしへの御（賀）
ひごきけるひよりもやく立まさりぬ人る言しうら

なんかうへハこゝよなういつくしかりけり。紫のうへの
れ心よをことよ。もしぐこゝろ給しゆへ。白三宮ハ
二条院よりしまゝす。其宮をばしさうやんどなるさ
まれよをさなりなて。今上こうどこゝろ紀いうじくかな
しうしなりうしづき罪させ給なれば。内ずゝ紙
きさせなりなへど。なる紙心やすさ。二条院恵うすさよく
しる給なりけり。白ノ元服しなてハ。其ノ白宮とさしも。
紫ノ内給ひし對之
女一宮。六条院のこれこれまちの東の基をもよれ
しつゝひをあしくめずおりしましておさゝ夕ゝ恵
白ノ兄之後或ハ二宮
まゝび罪の給。二宮もおなじおとゞのもんぜをぬぐの
れやすゝどこゝろよしなて。極つゞをれざうしく



をばもてはなれてもあるまじうともむけて、いといたうかしづききこえ給ふ。六の君（夕ノ藤内侍腹之）なんそのころすこしわれはと思ひのぼりたるみこ達上達部の御心つくすくさはひにものし給けり。院（源）かくれ給て後、さまざまにつどひ給へりし御方々なくなくつひにおはすべきすみかどもにみなおのおのうつろひ給ひしに、花ちる里ときこえしは東の院（二条ノ）をぞ御そうぶんの所にてわたり給ひにける。入道の宮（女三）は三条の宮におはします。今きさき（明石中宮）はうち（今上）にのみさぶらひ給へば、院（六条ノ）のうちさびしく人ずくなになりにけるを、右（夕ノ）の大とのは人のうへにていにしへのためしを

こゝくまもいけり限の世を心をとゞめて川くりしめ
たる人の家ゐの名所（みごり）なく打拵（はて）られて世れなるひ
もつひなくこゆるいひと衣をもられさしらるゝを
我よるあしんうぎりぐるこの僧（六条）あしさず御とりの
如何ちなどひとかげられもつまじうと思しの給
もきてうし（地）としのまちなれ一条の家（諸家）をつくし
生くせぬてなん三条（家ゐ）どれと我ごとる十文日ゞく
うりしうりひすこ給けり二条僧とて川くり
こゞき六条僧の妻のおとゞとて世をのしりし
玉の墓もたゞひとりの山すゑのゝあなりかりと
そして、あしのれうゝいおまるのゝやうち出れ

うきうきをしつゝおろひ罪しまへりぬ夕ほいとれハ
いづるのれこと紙も青の内心をきてのまくり
おくあうはうことなくおまゆきなや心りつゝう
まうりぬつよも基(ム)のうへ(岩)のうやうにて、さまるも
ぬへうましうばいつぞうろうをつくして、けうう
まうりこしなくまし、つねよいさくうもとりけきて
我心よをしこうきりぬべきふしもなくて通ぬひよし
こと紙ぞうちおしくあらずうなしうさ出きてし給
おめれきるの人院(源)をこひきてしぬなくとようくに
つけても世もらぐ火をけちこるやうに何ぞすも
とへなきなげきをもぬおりなりうりまして(源)の

うちの人々ハいとゞ帚木みやこちかきほどはさしもなきを
きこえず。限ありきさきがねなどまゐれまでまゐられ
むしきいの上のかたき様を心にとゞめて。萬よろづのこゝろ
つけて。世の人ハ給ひぬ時代もありし其の家の盛さかりをも。
げにおぼしらぬましも思しまさる抱にあらん。二条女三君
みやの葵あふひの君ハ。源氏の君のきこしつけたまへりしまゝ。
冷泉院のみかど。さりぬべき。おぼしつゞき。秋好きさい
の女もみこちかげなりまさず。心ばへおぼしはなしこそ。
うれしきこともろこしまめやかなるこゝろに
まへり。葵ノ元服などにも。冷院までまうさせ給。葵十四まで
二条にも行幸ありき。秋あさ台を守ねにぬてぬる

ぐ一所かりしけうをなん。かぎりなくうしづき給
れありき夜にをとらず。きさいの宮のれおぼしの。年
月にまきり給けるひにこそ。などうさしも
とうまでなん。舟こそ今は今はぐれなくなひを
しづうしまて。月ごとにれ念仏。としてりゆる
ぐびのれ八講。ありくのこうときれいとなるこ計
せしまて。つれぐにおうしませが。此恵の出入給紙。
くりてはおやのやうに。これもしきうげにおぼし
これがいと衣にて。院にもうちにもめしまつれし。
其宮もつぎくのこやこちもなつしきれ遊び
がうきにてどもなひまへがいとまなくくるしうて。

いかで身をかてしがれと思て給けり。おさな心ちに。
柏ノ密直ノミヤ
ほの字ぬひしことれ。おりくいぶかしう。おぼつ
かなくせいたれど。さふべき人もなし。女三やにはこ
とれ氣色にてもしりかりとおぼされん。かたはら
いたきすぢなれば。よとも此心にかけて。いかなり
けることにはなまれちざりにてかうやすらぬさ
ひたる身にしも成かんぜんげうたいしの我力に
とひかんさとりをもえてしがれとぞ。ひとりとで
これ給ける
芸
おぼつかな誰にとはましいかにしてちじめも
をてもしらぬ我力ぞ。地いしふべき人もなし。芸ん

かれて紙がまつてかゝうちすつも。くでおしもぞ
地あげしくのこ。ひめぐしり。こやもうえ
きりのれゝうちをやりしめて何ぞうりのれ隠心
まそうゝ。ほりまをむさ絡えん。うくあともずあり
けうとれえぐれは心ぶうしとおぼしあうかしあり
ゑん。ひとともまきまもり出さくじやをおぼ氏りしむ
べきことれそきしはうり。されまは気色をさくする
人のすきちありとゝ思ふ。明くれ川とめ絡やうあすめ
れど。ちくもあくおぼときめへう女のれさくうま志
雅ま。ちくすれ家もあきくうま玉とこゞさ絡りん
ともくしうくのあまぐしも。ちぼうしうめ

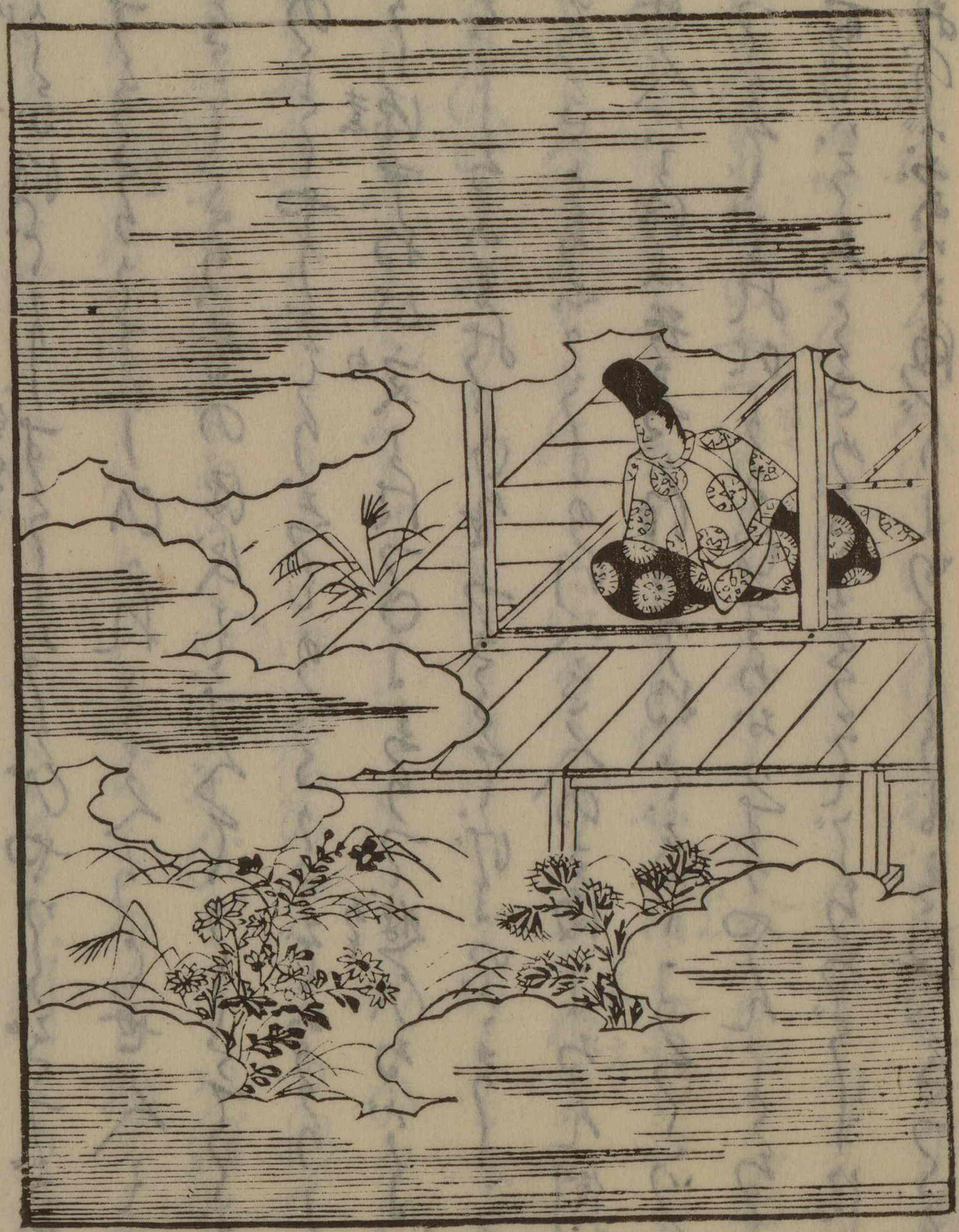
こゝは、これにあはれ心ちとこそすけておもしろうは
後の世ばかりとおもふ、みすゞき給りけんとや、やさ　拍子
しめせよ、むすぼれてやらでしろうつゝ、よは
人ぞもとめんをはせき心つくそ、光陰は如う　上ノ
かり給へれど、すまひもそず、されづく世中はまそ
あされて、あだしはきまでとるやうあるれ身のうきぐり
も、ころはつかずのこゝろぞ河ありあへり、うつゝは　今上心
三　さしなのれうきくの中ころつよせふくて、のち義
あつもれはかはされ、さきいのやもとくおもとう　[illegible]　地
ひとつかなかでごやうちあやともはおひかで
あそび給しれまて、あし、がきくあるめ給のぞ

まれずして心ぐるしう捨とおもしうもこそあれ
とりぬとく院の御事の後しをせむもこそ治
つくづくなずせむさくしめ入りかのおとにいとを
わかれこそのあさましくよりもこそあれあさをぞこうやうに
やんごとなくもちてあるよしつきなり給ひ者光あると
思ひしはさりまうくあるさいれ見てあるかなしそり給へうち
こともなるくみれうきもあるかなくあるとあるしるは
心さ思も拾なく世中なきあはれしあるかなしめ捨て
あるひあきれひかりとがきばいのうずまでしいめ
捨つあまさりつくしき世のこぞれも出来ぬべくて
しをもとなくすぐしあひて後の世めぐ御

けとめもぞくらし給ひもずよろげさりげなくて
久しくのどけきれ心をさてまとそありしが、この
美れまぐしきよ世れ見しいとすぎて忘あがり
ようことこそなくなどぞ抽し給ひげりさるべくて
いとけ世の人とは川くり出ざりけるかるまやど
わるかともこゆることそひたまへりかかたちも
そこはかといづこなんまぐれたるおれきよしと
こゆる所もなきが、たぐいとなる夜めしうもづし
げま心のおくなほかりげなるけもひ、人にはぬなり
なりかれ香かうぢしさぞ、此世れ匂ひなるず、おやしさ
までうちゆるまひめへる、けたりとをく滿(つど)たる程の

そひ風もまことに百姫のかもかほりぬべきゆゑし
けるられもさばかりに姫ぬるれる程のいとやつれど
こゝぐありちるやはあるべきさ海ぐにまれひとにま
さんとつくろひ用きすべかりをかくかくてもちるま
でうち思ひ立ちたんも地の人海もしるきほのめさ
のかれあるまじきにうるさがりておきくとりもつけ
給ひどおまるのれかたひつまうづもれたるかうのぞ
もこの君(芸)のいつかしもちき匂ひとくもへおまへ志
茲の木もちれくこんでかけ給梅の香は茲海の雪下り
もぬれ弟にしむる人おほく秋の空にぬしちきふぢ
ぢる海をもとのかほりはかれてなつしき迎風(とひ)こ

とよおりなしうしなんまきりけるうくあやしきま
で人のとがむるうましこのへるを（匂ノ）無なるんことく
よりもいどましく見してそれハつぎとよろげのを
ぶれこるうつしとしめ給ふ多のことつぎるおもせい
とおまへおまへの前栽にも其ハ梅の菜園（ぞの）をながめ給ふ
秋ハよれ人のめづる女良（をとこなべし）菜さしかれつまるすめる
萩の家にもおきくれ心うつし給ひず老（おひ）をとすうく
きくにおとろへゆく少ぢぢる風もれげなきまれも
うりなどハいとすきまじき穀がれの比ほひまで
見しすてずなどつぎとめきてうまめづるしをなん
こそくこのましうおもしけり



がなほどり。すくしなりびやりさすぞそ。
すきくりくりしひれまへりと。世人もふ
きくしり。昔の源氏もすべてくしてそ
のくやうがくり。おもしのくるくそなりし
り。源中将此文にはつゐまりつ遊びなどよも。
きしろふまれしをふきてげにいとましくも
おきとちふくしのけべき人のさ海になん。例の
世人は。ほふ共なる。ほうけ中将と。きくまくいひ
つゞくて。それにしさむすめおりすりやんごとなき
所ごはこゝろときめさにきてしごちなどし。治も
あれば。家はさ海ぐにありしうもきぬべきつくり

をばの給ふりて、人のれけまひ事様をも気色とり給。
ひざとれ心につけて、おぼせてうへへとりあつかり
そり。始氣流の女一家（こきでん）をぞ、さやうまでも言ふらがや。
ひまなんしと思しうは、母女（こきでん）れもいとをも
くこころまくまれし給あつりまて、娘（於ノ女一家）家のれ
けまひげまとありがたくすぐれて、よそのまても
おいしまする。まして、すくしちくもさふひなれ
ふる女房などの、くちしきれ事様のことまふれて
男しつかりなどもあるまいとじ（旬ノ）世びがたくおぼせ
べかめり。中（甚）ねは世中をふくあぢきなき物まふ
すましふる心なれば、中くこころとゝめて、引もなれ

がうきせや御しんなどせんまゝ。ワづらりしきせ
あくんあらうまうくづくもんは。けしましくなどせ
すて給さしあらうて心にせむべきことのなきほど。
きしぐつにやありけん。人のゆるしなりしんこと
などはましてせよるべくもあらず。十九(葉ノ)に如給とし。
三位の宰相(芸好て宰相と云ふ)にて。私中相もしなれ給ひず。(冷)こうど(秋好)舌の
中もてなしにくく人にてはもぐうりなきかでこそ
人のおぼしにてもおしこまへど心のうちには力を
せしうるまて。抽衣りなどもありかれど心に
おもてもやるとうなりすきごとおきくこのまず。
よろげのことまてせげめつ。とれづくしかよすけ

たうころざ海を人ともしられぬへり。三白文そしは
そへて心をくだき給める。院(冷)の姫(女一文)の御あたりをは
うるはもひ(慧)とろ院(冷ノ)のうちにおけられ立ちれぬへば。
とるゝかれてし人のありさ海を望ミまりにげる
いとちべてなしず心にくゝゆへくしきれもて
なし限なき代(慧心)おなじくはげるうしやうなん人を
えんにこそいけり限の心ゆへべきけまなれども
なぐら大るこそへぐろ家ことなく覚しれ。ひめ(女一文)
こやの御うるざ海のへぐそ。ハこまなくけどをく
なしハさせ給もこともとりりけづらもしかれば。
おなぐちにもまじらひよりず。もしころよりかの

心もつけ、それも人もいとあしうるべきことゝ心心
まて抱なれようこともなりけるゝ地ゞがかく人ゝ
のぞられんと成ぬへるを信なれば、なられくなげの
云葉とちらし給あらりも、こゝろなくもてゝなるゝ
こゝろなく、なびきやすとなるほどゝ、なれづらなる
ざりのうらひ所もあまたゝなるを、人のゝめまゝと
ゝとしくなどもてなさず、ゆとらくまぎらひしそ
ゝちらとなくなさけなるゝぬ程の中ゝ心やましきゝ
心よれり人(ミヤヅヘノ)ハいづかなられつゝ三条の女(女二)ゝまりあつ
まるハあまるありつれ(芸ノ)なきゝ、ミヤヅヘノ人ゝもゝらしげなる
ゝぞなめれど、こゝろなんよりハとこゝろぼそきゝ心

まびて。さもあるまじきくもれ人ぐのもうちゃさ
然りにこれこそうけたるおほかり。さすがりいと
なつしう。三家ある人の出る様なれば。うる人これ
心にもうしろくやうにて。こすぐさる。女三 女のおりし
まさん世の限ハ。朝夕に出めがれず出んぞこれ。み
なんをぐるとさひのゆへば。右のおとぐも。つまる
もれし。給れむすめたちを。ひとりぐもと心ざし
給ちぐ。えことにいで給ひず。さすがにゆしげ
なきなりしひなりをとハさひなりをど。この君ぐちは
をさて。ほかりは。なずしひなりへき人の。もとめいづ
べきよりはと。覚しつづしふ。やんことなきよりも。

内侍(雅光姫)のすけぢしの六の君とかいとすぐれておかし
げに心ばへなどもたしひておひ出給せ。よれ見しの
おとしめざ庵なるべきしもかくあたしこさ伝心(タツ)
ゆしうゐして一条(藤原)家のさらあつかひぐさもなん
られで。さうぐしきまゝむかへさりてなりたまへ里。
ワざ(タム)とハなくて。此人(蓋白)ごまえ(六宮を)せそめてハかなしぶ心
とゞめ給てん。人のありさ庵をもこゝろ人ハことに
こそあるべかれなじ見していといけうしうえ
もてなし給ひず。いまめしくおかしこさやうに。もれ
このこをさせて。人の心けけんこゝりおほくけいり
なし給。のりゆゑれかへりあるじのまうけ。六条院

まて、いと心ことに志(夕)ゐて、こゝ(家たちの事)をもおりしまさせん
のうろづひしゐへり、それ日こゝろちおとなり
おりすゐ、これさつしひ給、ささいだしのもいづれ
ともなく、けたくさまげにおりします、中にもこの
(句)笠(ゝ)の家ハ、げにいとすぐれて、こゝろうこゝろ
(今上ノ御手ニ)四の家こひたちの家と字ゆゑ、文衣だしのもこ
なしにや、けたひこゝろうをとりゐへり、別の右の
あながちにうちぬ、例よりハとくこともてし、(夕)たゞ
まで給、(句)笠(ゝ)の家ひたちの家、(ささい)給びしのよのこやと
ひとつゝ後にまゐるさのせなりてまで給、(慧)寧相
中ゐハ、まけ方にて、ととなくまで給にけるを、(夕詞)凡こ

逢おりしますれをくりは来り給まじやとどしとめ
さきて此子の来り（三人共ニタノ子逢ニ）中納言君大弁ちぎさしぬ
上逢ア あまりに是皮（これかれ）はのりまぎりいぎ（タノ）ちひそく
六条院へおりすぎのやく祝かりは雪いさくかちりて
えんちかくそれ時やもれく青おしさ祝はふさ
くてあそひていり給をげはこうを垂ていかちんん
仏のれ玉まりけかやうのおりかしの心やるも一和は
もとめんとこしらり志んぎの南のひさしはつるの
ごと南むきは中かねつさくり小むさはむくて
えんがれこそくち上逢アの此屋（ミざ）ありけかりしけ
ばこしまりて此面白くなりけはもとめ〻舞

てかれし袖ぞのうち人すゝ風にぞ家ちるさ梅かへ
いとゞくはしらびこぼれさる白ひのごと打ちり
わされしに例の中ねのれぼりのゞとゞしくまて
もやされていひちしずる宿めしらうまのぞく
女房なども、やゝはあやなく心ときめきすべかめれど
ことげなるにうしもあれなりけれとめでおへり、おとゞ
もめでしとも思ひしうちよりいもつれなりけり
てこぞれぬ宿にかさめろとて、だのすけも声
うち人のかへや、ついうちらうとぐしやとの給
へばまくらめほどなま袖のますなど

69038
6 AP78